

[書評]

崔相龍著 『中庸民主主義』

村 井 洋

1

本書は中庸の政治思想としての意義を古代儒学思想と古代ギリシア哲学の古典に求め、その現代的応用を論じた書である<sup>1)</sup>。

以下簡略ながら、全四章からなる本書の内容を、章を追って要約することにした。

(1)

第一章「問題意識と方法」は、文字通り、本書のテーマに対する著者の問題提起と、このテーマに接近する方法の特性について述べている。

本書の目的は古代中国の儒学と古代ギリシアの中庸思想の共通点と差異点を分析し、政治思想としての普遍的意味を探求することにある。この際、両者の共通点として著者が重視するのが「時中」の概念である。これは、人間関係における具体的状況に適合しようとする主体の姿勢を指している。すなわち、単純な中間値を計算することではなく、人間関係を取り巻く諸条件を把握したうえで選択的判断を為すことであり、受動的な命令待ちの態度ではなく、積極的な状況への関与を意味している概念である。特に、ことが政治のように特有の条件、(マックス・ウェーバの『職業としての政治』を想起させる)「善から悪が生じることや悪から善が生じること」にある時、親和的な思考法である。著者の指摘によれば、中庸の思考は、「人間は万物の霊長として他の動物とはあきらかに異なるが、決して全知全能の神にはなれないという、人間能力の限界に対する深い自覚と省察を土台に置いている」という人間理解を背景にしているのである。

(2)

この「時中」という概念の掘って来る古代中国思想の中庸概念を考察したのが第二章「古代中国の儒教政治思想と中庸」である。ここで著者がテキストとして選択するのは、『論語』『孟子』『中庸』の三書であり、これらを中心にして考察が行われる。

『論語』は「中庸」の概念が初めて登場する中国古典である。君子にとっての修己の学であり、同時に「政は正なり」に顕著なように「政治学」の性質を有する。この点において倫理学と政治学が連続していた古代ギリシアと同一のスタンスであると著者は捉える。

「中庸」の解釈として今に至っても重きをなすのが、朱子による、「中」を「過不足のないこと」、「庸」を「平常」とする理解であろう。この朱子の解釈を受け継ぎながら現実政治の諸問題に展開した、十九世紀の朝鮮儒学者丁若鏞(茶山)<sup>2)</sup>の解釈を著者は重視する。これは、他者を配慮する契機を尊重しつつ、実践的状況的选择を重視するものである。この時「権」の概念が中心的役割を果たすものとして浮上してくるが、著者によれば、これはアリストテレスなど古代ギリシア思想家の「思慮」(phronesis)と等価とも言えるのであ

る。

次に著者は『孟子』を手掛かりに、中庸概念の展開を追ってゆく。孟子の中心概念である性善説を、性には善悪なしとした告子と対比させることによって際立たせ、さらに、孟子を、「自愛」に徹する楊子と普遍的な愛を説く「兼愛」の墨子との中間を行く存在として位置付けている。さらに、孟子が孔子と比較して異なっている点として、小人は如何にしても君子に成り得ないとした『論語』の記述に対して、『孟子』では、小人もまた、君子になり得るとしたことでありと指摘している。

孟子は「他人が傷つくの忍べない心」を基底に据え、状況に対して中庸をもって対処する。中庸を得るために、「時中」と「権」は孟子においても大きな役割を果たしており、「一方を執ることを嫌う理由は道が害されるから」と民心を推し量る努力を厭わぬ梁惠王に孟子は「権」が有効であることを進言しているのである<sup>3)</sup>。

『中庸』はもっぱら君子が己を完成させる「修己」の学と解されるが、著者は、この自己に向かう姿勢中に他者と政治に通じる契機が潜んでいることを見逃さない。例えば、「慎独」について、「その意味は孤立した個人の自己満足ではなく、絶え間ない社会的、政治的な人間関係の中でつねに自己省察をする状態のこと」としている<sup>4)</sup>。『中庸』は治国における祭祀の重要性を説き、統治者の人間性論を経由して政治論に至ることを明らかにしている。こうした運動を支える意味で重要なのが「誠」の概念である。「誠は人と天を合一させる実在（reality）としての本質概念であると同時に人と天を合一させ動かす力という点で動態的な概念である」（104頁）としているのである。

### (3)

第三章「古代ギリシャのポリス政治思想と中庸」はプラトンとアリストテレスを中庸論の趣旨に沿って解説したものである。プラトンでは『国家』、『カルミデス』、『政治家論』そして『法律』が、アリストテレスでは『ニコマコス倫理学』、『政治学』がテキストとして取り上げられている。

『国家』の主要テーマは「正義」であるが、この「正義」はプラトンが述べる場所では個人の魂の秩序であると同時に、国家の政体のあり方である。著者は、双方とも中庸の性質を持つものである、と主張する。まず、指導者の資質として「節制」が要求されること、指導者教育として音楽と体育が重視されるが、これらは偏重しない調和のとれた教育でなければならない。こうして養成された指導者は、アイデアを認識し政治の規矩となる人物であるが、当然のことに禁欲と節制を体現していなければならない。

次に政体循環論が紹介されるが、ここでは、プラトンの民主政批判の著者による理解が重要と思われる。プラトンの民主制批判は民主政一般を批判したものではない。僭主政を容易に引き出してしまふ性質をもつ衆愚制を標的にしている。この僭主政が避けられるべき理由は、この政体が「節制からの逸脱に明け暮れる」「禁欲から最も遠い」人間類型・政体であるからに他ならない。

この後、著者は『政治家論』と『カルミデス』を経て『法律』の解説に入ってゆく。法律とは一言で言えば、節制の、従って中庸の制度化である。

後述のアリストテレスと同様、プラトンも人間を「中間者」と捉え、秩序を通して神的なものを追求する存在者と捉えた。この時秩序とは異なったものごとの「混合」であるが、

これは、適切なもの、すなわち、各部分の比例的で均衡ある混合である必要がある。このような、中庸に従う思慮ある生が幸福な生であるとプラトンは考えたと著者は説くのである。

中庸の脈絡から混合政体を捉えたプラトンの『法律』は、スパルタをその典型として描いている。ここでは人民の強い情熱を抑制するために二十八人の監督官の権力を強化し、重要問題について君主と対等の権力を与え、さらに、監督官制度をも導入した。このように自由と知恵を中庸の原理で結合したものが混合政体である。

古代ギリシアのもう一人の中庸論の主はアリストテレスである。アリストテレスは人がポリスで生きるのは幸福を得るためであるが、幸福とは最高善であり、中庸的生であるとする。すなわち、自然的衝動を抑制した、過度と不足を排除した状態である。これは正しい習慣を通じて形成されるもので「正しいときに正しいことに対して、正しい人が正しい動機で正しい態度で感じることは中庸であり最高善である」(158頁)。こうした幾重もの「正しさ」は一般原則に照らして判断されるのではなく、状況的性格の強い「実践知」「思慮」(phronesis)によって把握されるものであり、これは、既述の「時中」と同義である。実践領域とりわけ政治領域は「複合的要素が力動的全体性として現れるため」一般的規範の形態をとることができない。「一つの円の中心を見つけることは誰にでもできることではなく、それを知る人だけがもつぱらできること」(『ニコマコス倫理学』)なのである。すなわち、思慮深い人のみが「当てる」ことができるのである。

アリストテレス倫理学の後世へのもう一つの寄与は「正義論」にあると言ってよいであろう。著者はこの正義概念においても中庸の契機が働いていることを示す。特に「分配的正義」について、「公共の財貨を分配する場合にも、当事者たちが寄与したことと同じ比率でなければいけない」とした箇所を引用し、ここで示される「均等」という基準が過剰なく不足ない中庸の性格をもち、ゆえに、アリストテレスの正義論を中庸の正義論であると特徴づけるのである。

アリストテレスの『政治学』は政体(国制)の分類論を含むが、ここにおいても中庸を求める著者の視座は一貫している。一人支配の利点に拘ったプラトンに対して多数に好意を寄せているのがアリストテレスの特徴であるとし、アリストテレスが中庸の状態として提示する「ポリティ」を解説する。この政体は混合政体であるが、混合の仕方には工夫が必要であり、裁判規定上での貧民擁護、財産資格上の多数市民の参加、財産資格の撤廃による職責の開放などによって、寡頭制と民主制の混合を図ろうとしたことを紹介している。個人財産の擁護、適度な財産所有階級による国政運営、人口の適正規模、適切な領土の広さなど多様な論点において中庸の観点からの提言を行っている。

かくて、これら政体論の中心を中庸思想が貫流していると捉える著者はここに「多数の支配と法の支配という二つの正義の原則に土台を置いた民主主義政治体制の原型」を見届けるのである。

#### (4)

以上のように、中国朝鮮儒教思想と古代ギリシア哲学における中庸概念を解釈してきた著者は、終章「中庸と平和の政治体制」の冒頭でこれまでの叙述を振り返りつつ、中庸思想の特質を纏めている。箇条書きにすれば以下のようなになる。中庸は①概念的に曖昧で

あるものの、過不足ないものと捉えられ、規範的な価値を付与されている点で古代ギリシアと儒学思想との一致が見られること。②最適均衡であり正義であること。③可能な最善方法の選択であること。④「思慮」(phronesis)、「時中」という精神の生活として現れること。⑤複合的な政治の現場において高度に成熟した統治術であること、などである。

ところで、著者の関心は狭義の比較思想研究には留まらない。中庸概念を政治的個人、政体、国際政治の三つの次元に展開して、現代の政治状況における中庸概念の適用可能性を論じている。

著者は坂本義和氏を意識しながら、現代は「相対化の時代」と捉えうる時代とし、ここではイデオロギー、国家、権力などの価値と影響力が低下していく。この中で政治的リーダーシップに求められるもの、可能なものも変化した。これに応答するものが中庸的リーダーシップであるとする。このような時代には「極端ではない中間領域における均衡、折衷、混合、融合などの知的、政治的想像力が必要であり、まさにこのような中庸的構想力こそ、相対化時代の政治的指導者の資質である」(193頁)からである。

さらに著者は古代ギリシアの中庸的政体論を現代に適用する議論を提出する。民主政体への承認が行きわたった現代においては古来の中庸原理が革新的価値として受容されているとみてよいのだろうかという議論である。

そして、中庸思想が、終わりなき戦争状態の消滅という過程に果たす役割にも思いを致す。相互承認の思想でもある中庸思想が、平和思想においても息づいているものとする理解を示すのである。

## 2

本書の特徴は、言うまでもなく、中庸を、古代中国以来の儒教思想の伝統と古代ギリシア哲学との共通の概念として捉えた、比較思想論の画期的研究であることにある。中庸概念が東西諸文明の間の比較思想研究の対象たり得る可能性については夙に学界では指摘されてきた。しかし、それを実現するものは少なかった<sup>5)</sup>。この作業は実際、困難な実質を伴っていると思われる。なぜなら、儒教思想の伝統が、教訓的言述あるいは「定言命法」に近い形で行われているのに対して、プラトン、アリストテレスのテキストはいわば *logon didonai* (正当化の論述)として語られているからである。このように思想的言述に込められた異なった「文法」を横断する作業が行われた意義は極めて大きいと思われる。

第二の特徴は、中庸論が現代政治にも、指導者理念、民主政治、国際平和の領域に対して活用し得る思想契機として提案されている点である。

一方、本書を以てしても必ずしも十分に果たされていないと思われる、乃至は次世代の研究に差し込まれた「バトン」と考えられる点を強いて述べるとすれば、中国と古代ギリシアの中庸の間に存在する微妙な差異点の解明があるであろう。例えば、古代ギリシアにおける中庸が、その背後に弁証的思考法を秘めていたと想定されるのに対して<sup>6)</sup>、儒学における中庸は確かに一定の主體的、能動的、積極的側面があるにもかかわらず、全体的に静態的である印象を受けることである。

本研究を受けた今後の課題として想起されるのが、この「中庸」のように、文化横断的に共通する思想類型については、道徳心理学的な接近が可能ではないかという思いをいだきうる。勿論それを答えることを以て研究が完結するというわけではなく、思想の心理学

的次元を解明するに留まるとも言えるのであるが。

このような問題提起を行ったことも含めて、本書の刊行は政治思想史研究に対して新鮮なインパクトを持ち、文明間の思想比較、また、思想原理の現実政治への適用に解答を与えたという点でも、大きな意義があると言えよう。

## 注

- 1) 韓知延、林紅伶、文斗卓訳 小倉紀蔵監訳筑摩書房、2022年3月刊。著者崔相龍教授の来歴と本書の成立事情については、本書巻末に監訳者小倉紀蔵氏による紹介がある（「監訳者あとがき」）。これに基づいて略述することにする。氏は1942年韓国慶州の名門の家系に生まれ、ソウル大学で学んだ後東京大学法学部の坂本義和氏（政治思想史・国際関係論・平和学）のゼミに所属した。帰国後高麗大学で講義する予定の日、朴政権の官憲に逮捕拘留され、一年間の過酷な獄中生活の後、裁判で無罪となり釈放、以後学究生活を続けた。2000年から2002年高麗大学在職中に駐日韓国大使を勤める。なお、日本では成蹊大学、法政大学などでも教鞭をとったほか、鳥根県立大学を含む多くの研究機関でレクチャーを行っている。
- 2) 本書に繰り返し言及されている19世紀の実学派朝鮮儒学者丁若鏞に関しては、井上厚史氏の業績が遺されていることを記しておきたい。河宇鳳著、井上厚史訳『朝鮮実学者の見た近世日本』ペリカン社、2001年。井上厚史「封印された朝鮮儒教」（『現代思想』2014年3月）、同『愛民の朝鮮儒教』ペリカン社、2021年、ほか。
- 3) 中庸を「中道」「中行」と同義とする解説の中で『周易』が引照されている（80頁）。過・不及がないことは「中行無咎」であり中庸の実践であると解される。現代政治と『易』との関係については、李曉東『現代中国の省察』国際書院、2018年を参照。「易において、陰陽の変易は、両者の対立、推移、変通、反復、相排（斥）、相交というダイナミックスで語られており、それによって万物の変化と相互作用が説明される。その法則性を読み解き、この動態に順応することによって『中正』という理想的な状態に達することが唱えられていた」としている（同書98頁）。
- 4) この姿勢について、「何もしないときこそ最も活動的であり独りだけにいるときこそ、最も独りでない」としたカトー（Cato）の言葉を想起することができよう（ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま文庫、1994年、504頁）。
- 5) 三渡幸男『比較思想の可能性』北樹出版、1990年。松浪信三郎『中道の思想「ちょうどいい加減」とは？』河出書房新社、1988年。中村元監修峰島旭雄責任編集『比較思想事典』東京書籍、2000年。なお、古代ギリシア思想史において実践理性（phronesis）概念の変遷を討究した書としては、藤井義夫『アリストテレスの倫理学』岩波書店、1951年があるが、これとてもプラトンとアリストテレスに限定されている。また、近年注目されている徳倫理学の中には、古典古代の徳倫理学への回顧ならびに古代中国思想の徳概念についての論究がある。但し、これらの研究によって読者が比較的視点の形勢を促されることはあっても、個々の研究としてのこれらは比較思想研究ではない。例として、ラチナ・カムテカー「古代の徳倫理学－思慮に焦点を当てた概観」、フィリップ・J・アイヴァンホー「徳倫理学と中国の儒教の伝統」（ダニエル・ラッセル編『徳倫理学』ケンブリッジ・コンパニオン、立花幸司監訳、春秋社、2015年）。さらに日本における試みとして、菊池理夫・有賀誠・田上孝一編著『徳と政治』晃洋書房、2019年。
- 6) この点について、ヤスパース『世界観の心理学』（1919年）では、アリストテレス的「中」と弁証法的思考を区別し、前者を「スコラの思惟」として考察の対象から除外している（同書（上）上村忠

男・前田利男訳、理想社、1971年、170頁）。

キーワード：中庸、時中、正義

(MURAI Hiroshi)